国際交流基金日本語教育紀要
第11号（2015年）

〔実践報告〕

教師ポートフォリオ作成ワークショップ

－自律的、主体的に学ぶ教師の支援を目指した教師研修のデザイン－

近藤裕美子

〔キーワード〕　教師ポートフォリオ、研修デザイン、ELP、ポートフォリオ作成ワークショップ

〔要　旨〕

本稿は、現職教師向けに実施した教師ポートフォリオ作成ワークショップについて、研修デザインの過程を報告し、研修の意義と課題について考察したものである。自律的で継続的な学習を支えるツールとしてポートフォリオがあるが、教育経験や教師研修参加経験を通じて内省し、学び続ける教師を支援するものとして教師ポートフォリオがあり、それを作成するワークショップを実施した。研修をデザインする際に、各参加者が日本語教師としての「過去」「現在」「未来」を繋げられるように研修構成を考慮するとともに、ポートフォリオ作成体験を通じてポートフォリオ活用に対する理解がより深められるよう留意した。

研修後に実施した質問紙調査の結果から、「ポートフォリオの理解」及び「教師の生涯学習支援」の面で参加者からの好評価が認められたが、教師ポートフォリオを今後も継続して活用して行く方法や、教師ポートフォリオの作成経験を各教育現場での学習ポートフォリオの活用に繋げる点で課題が残った。

1．はじめに

1.1　本稿の概要

本稿は、教師研修の参加者が自らの教師ポートフォリオを作成する体験型のワークショップに関し、研修デザインの詳細を報告し、研修の意義と課題について考察するものである。研修実施に際し、研修担当者である筆者は、「教師としての生涯学習支援」という側面と「ポートフォリオ体験と理解促進」という側面を考慮してデザインを行った。具体的には、研修参加者が教育実践や教師研修について過去の経験や現在の課題・要望について振り返りつつ、今後の課題やアクションプランに繋がるような活動を織り込むよう試みた。加えて、各活動の成果物を最後にポートフォリオにまとめるという作業を通じて、研修参加者がポートフォリオの構成や各構成要素の内容や意味を再認識し、ポートフォリオへの理解が深まるようデザインを行った。

また本稿では、このような研修が「教師としての生涯学習支援」や「ポートフォリオ体験と理解促進」の点で意義あるものであったかについて、研修後に実施した研修参加者への質問紙調査を分析し、その結果をもとに研修デザインの有効性と今後の課題について検討した。

1.2　教師を対象としたポートフォリオ

近年、日本語教育現場においても自律的で継続的な学習を支えるツールや学習プロセスの評価方法としてポートフォリオ導入が進められており、授業での実践報告が散見される（片桐2014：８－９）。ポートフォリオと言うと、その使用者として日本語学習者がまず想起されるが、学習者向けのポートフォリオの利用に留まらず、日本語教師の教師教育の文脈の中でも活用されるようになってきている（小玉ほか2007、松浦ほか2013）。

教師教育の文脈の中で語られる教師向けのポートフォリオには、その用途に応じて、以下の２つが挙げられる。教師が日々の教育活動を記録したり、教育業績の記録をまとめたりする「ティーチング・ポートフォリオ」と、教師研修参加の際に利用する教師研修用のポートフォリオ（以下、「研修ポートフォリオ」）である。ティーチング・ポートフォリオは、教師が授業実践を振り返り、授業改善につなげるためのものであると同時に、教育業績評価のための証拠書類や資料としても活用される（土持2007、松浦ほか2013）。一方、研修ポートフォリオは、教師研修という学びの機会に研修参加者である教師が学習者の視点で研修での学びを振り返り、成果を評価するという点で学習者向けポートフォリオに近いと言える。

本稿における教師を対象としたポートフォリオは、教師としての二つの学び、「教育実践に基づく気づきや内省からの学び」と「教師研修を通した学び」を内包するものである。つまり、ティーチング・ポートフォリオの要素と研修ポートフォリオの要素を含むものであり、教師として自律的に学習を進めて行く教師の生涯学習を支えるポートフォリオである。そこで、本稿で扱うポートフォリオを「教師ポートフォリオ」とし、ティーチング・ポートフォリオ、研修ポートフォリオと区別する。

なお、教師を対象としたポートフォリオの実践報告として、松浦ほか（2013）では、中国の大学教師向けの教師研修（全11回の連続型の教師研修）において実施した「参加者の教育実践での振り返りを記述するティーチング・ポートフォリオに研修ポートフォリオが組み込まれた、入れ子型ポートフォリオ」（p. 9）の導入の試みを報告している。

本稿における教師ポートフォリオは、教育実践の振り返りと教師研修での学びを内包しているという点やポートフォリオを作成する作業を通じて学習者向けのポートフォリオの理解を深めるという点で松浦ほか（2013）と共通するが、研修形態の相違による全体のデザインが異なる。松浦ほか（2013）の実践は２か月半に及ぶ継続型の研修であるため、ポートフォリオの講義やメンタリング、ティーチング・ポートフォリオの作成を組み込んでおり、研修の進行と平行して研修での学びを日々の教育実践にとりいれながら段階的にポートフォリオが導入されるような研修プログラムデザインが組まれている。

一方、本稿で取り上げている研修は、１回の研修であるため時間的制約がある。したがって、研修のプロセスを通じて段階的にポートフォリオを作成するのではなく、教育実践や研修参加

に関する個々の経験を整理し、現在の実践や課題をまとめ、これからのアクションプランに繋げる作業の結果、ポートフォリオが完成するようにデザインされている。

２．教師ポートフォリオ作成ワークショップ：デザインと実施

2.1　研修の概要

本研修は、スペイン日本語教師会とマドリード日本文化センターの共催のもと2014年４月に実施された、「現在・過去・未来の「教師としての私」をつなげる教師ポートフォリオ作成ワークショップ」という日本語教師向けのセミナーである。研修時間は３時間半で（休憩時間を含む）、研修参加者は23名（日本語母語話者教師22名）であった。当該国では2010年の教師会設立以降、全国規模の研修会やセミナーが年に５－６回開催されているほか、地方での研修会も行われているが、これまで教師の成長や熟達化をテーマにした研修やポートフォリオについての研修は企画されていない。したがって、研修参加者は過去に様々な教師研修を受講しているものの、自分自身の教師ポートフォリオをまとめる作業は初めてであったと推察される。

2.2　研修デザインの詳細

研修デザインに際し、主催者側から「具体的で実践につながる研修が好まれる」と助言があったため、研修形態として、講義と種々のワーク（個人作業、ペアワーク、グループディスカッション）とを織り交ぜながら進め、最終的な成果物としてポートフォリオを完成させるというワークショップ型で実施した。

2.2.1　研修目的

本研修では、研修目的として以下の２点を設定した。

（1）自己の教育実践、研修等参加経験を振り返りながら、現在の課題や将来に必要なことを整理する。

（2）教師ポートフォリオの作成体験を通して、利用者（教育現場における学習者）の視点から、自律的な学習を支援するためのポートフォリオ活用の意義や活用方法に対する理解を深める。

（1）は教師の生涯学習の視点から設定した目的であるが、岡崎・岡崎（1997）や當作・横溝（2005）が述べているような、自らの実践を振り返って内省し、成長し続ける「自己研修型教師」の育成に関係するものである。また、林（2006）は、自己研修型教師を目指すには、教育実践－観察－改善のサイクルを主体的に行うだけでなく、「自らの実践の中で、その時々に

あって、自分に必要なことを見定めて、適切な方の研修に自ら選択的に参加する必要がある」（p21）とし、「自己選択決定権」と「実行力」を「自己研修型教師」の要素として言及している。教師の成長に関し、教育現場での実践にとどまらず教師研修参加にも言及している点は、本研修において教育実践の中での振り返りだけでなく、研修受講経験の振り返りも踏まえて目的を設定していることと関連づけられる視点である。

（2）は、知識として理解するに留まっていたポートフォリオを利用者の視点で体験することで、ポートフォリオについて理解を深め、効果的な活用に繋げることを目的としたものである。松浦ほか（2013）は教師が研修ポートフォリオを記入することにより学習ポートフォリオの特徴を理解するという目的は達成されたと報告しているが、教育実践の中で学習者に使わせるという立場を離れ、利用者の立場でポートフォリオに取り組むことによって、これまでとは異なった視点からポートフォリオを理解することが期待される。

2.2.2　研修内容と構成

次に研修の内容と構成について述べる。2.2.1で述べたように、本研修では研修参加者が「自己の教育実践、研修等参加経験を振り返りながら、現在の課題や将来に必要なことを整理する」ことを研修目的の一つとして挙げている。

そこで、研修の構成として、「過去」「現在」「未来」という時間軸を用いて研修のパートを分け（図１参照）、その３つのパートを通して、研修参加者が自己の教育実践、教師研修やプロジェクト等の参加経験を振り返りながら、現在抱えている課題を分析し、今後のアクションプランを考えることができるようデザインした。なお、各パートの流れは、振り返りの活動が円滑に行われるように、各研修参加者にとって身近な事柄であると推察される「現在編」から始め、「過去編」「未来編」と進むように配置した。

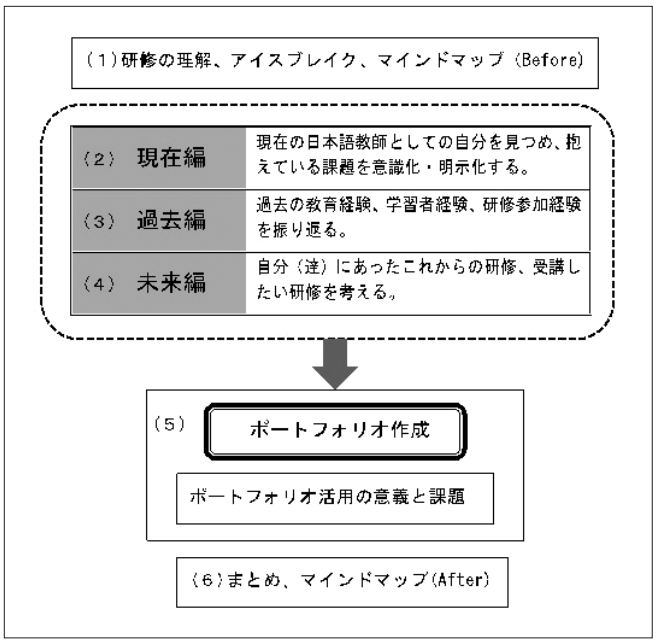

図１　研修の構成の全体像

本研修のデザインの詳細（活動内容と各活動の目的、手順、作成物）は、稿末資料の通りである。研修中には合計14の活動

を実施したが、各活動ではワークシートを記入したりするなど「成果物」を作成し、最後にそれを教師ポートフォリオとしてまとめられるようになっている。また各活動は、活動（5）（6）のように現在の関心や教師として自己の特徴を意識化する、活動（8）（9）のように過去に参加した研修をリスト化し自己にとっての意義づけを行うなど、自己の教育実践や研修等参加経験を振り返り、現在の課題や将来に必要なことを整理する機会が提供されるようデザインされている。

次に、研修目的の２点目であるポートフォリオの理解促進と研修デザインとの関係について述べる。本研修では、ポートフォリオの作成体験を通じてポートフォリオへの理解を深め、現場での教育実践にも積極的にポートフォリオを導入して行くことを目指している。そこで研修をデザインする際に、ヨーロッパの言語学習や言語教育の基盤となっている「ヨーロッパ言語共通参照枠（Common European Framework of Reference for Languages、以下 CEFR）」の理念を具現化したものである「ヨーロッパ言語ポートフォリオ（European Language Portfolio、以下 ELP）」を参照し、教師ポートフォリオの枠組みを設定した[(1)]。具体的には、研修ポートフォリオの各活動の成果物をまとめる際の項目が、ELP の３つの構成要素「言語パスポート（Language Passport）「言語バイオグラフィー（Language Biography）」「資料集（Dossier）」と関連づけられるよう留意した（表１）。

表１　ELP と本研修の教師ポートフォリオの対応

European Language Portfolio [(2)]（ヨーロッパ言語ポートフォリオ）	本研修で作成した教師ポートフォリオ
Language Passport（言語パスポート）	Passport/Passaporte（パスポート）
所有者が持っている言語能力や言語学習経験、異文化経験を簡潔にまとめたもので、それらを簡単に確認できるパスポート的なもの。	参加者が、自分がどのような日本語教師かを示すために使用できるプロフィール。
Language Biography（言語学習記録帳）	Biography/ Biographia（教育実践や研修受講経験の記録）
所有者が学習目標を設定し、自己の学習過程を観察し、重要な言語学習、異文化経験を記入していく部分。所有者自らが学習計画を立案・実行していく上で、自己の学習過程、学習進度を観察し、自己評価や振り返りを行っていく助けとなるダイアリーのようなもの。	参加者がこれまでの教授経験や教師研修の受講経験の記録を整理し、まとめたものや、学び続ける教師として、今後参加したい研修やプロジェクト等を記入したもの。振り返りや今後のアクションプランにつながるもの。
Dossier（資料集）	Dossier（資料集）
所有者が学習言語の熟達度示すのに重要だと思うものや言語学習、文化学習の達成や経験などの記録を自ら選んで保管する部分。	本研修で学んだことや成果、Passport や Biography と関連した活動の資料。

また、これらの関連性が明示されるように、各活動のワークシートや成果物には ELP の３つの構成要素の頭文字を示す[P]、[B]、[D]という印と通し番号を示す数字があらかじめつけられており、図２が示す通り、活動（11）でワークシートや成果物を[P]、[B]、[D]に再構成する

と、ELPと同じ構成要素で一つのポートフォリオにまとめられるようになっている。そして、ポートフォリオ作成後の活動（12）で、作成体験を通して感じたことを「利点」と「困難点・課題」に分けて記入してもらい、ポートフォリオの活用の意義や課題を確認する機会を設けた。

これは、研修参加者がポートフォリオの利用者の視点からポートフォリオ活用について考察することであり、研修目的（2）「教師ポートフォリオの作成体験を通して、利用者（教育現場における学習者）の視点から、自律的な学習を支援するためのポートフォリオ活用の意義や活用方法に対する理解を深める」ことに繋がるものである。

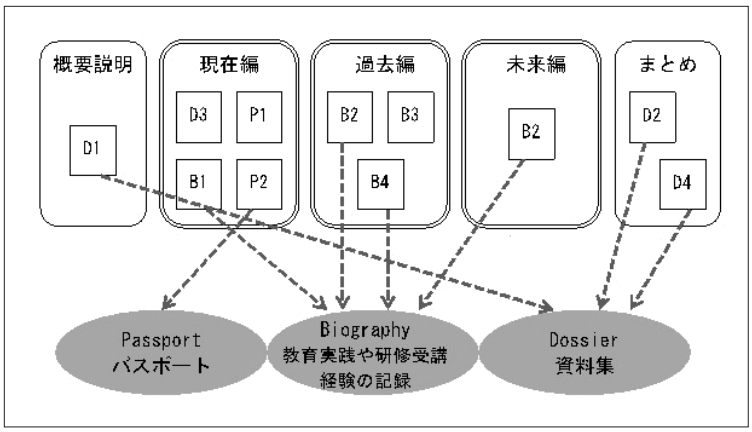

図２　研修の構成の全体像

３．教師ポートフォリオ作成ワークショップの意義と課題

研修後に実施した質問紙調査を分析し、教師ポートフォリオ作成ワークショップの意義と課題を検討する。質問紙の配付数、回答数は、ともに22部であった[3]。質問紙には質問項目が10あり、５件法で選択理由を記入する質問と自由記述式のものとで構成されている。また、質問は研修の満足度など研修全体に関するものも含まれているが、本稿では教師ポートフォリオを作成するという研修デザインの意義と課題について検討するため、特に「振り返りによる現在の課題や将来に向けてのアクションプランの整理」と「ポートフォリオの理解促進」との２点に絞り、質問紙の集計結果の分析を行った。具体的には以下の４つの質問である。

（1）教師ポートフォリオ作成作業はポートフォリオの理解に役立ったか［選択式＋理由］
（2）今後教師ポートフォリオを使いたいか［選択式＋理由］
（3）教師ポートフォリオを作成して感じたこと［自由記述］
（4）まだよくわからないこと、もっと知りたいところ［自由記述］

3.1　各質問項目に対する回答の分析結果

3.1.1　（1）教師ポートフォリオ作成作業はポートフォリオの理解に役立ったか

研修参加者のほとんどが「とても役に立った」「役に立った」と回答している（図３）。

「とても役に立った」理由として、「実際に体験してよくわかった」「実際にやってみてわかることが多い。特にポートフォリオはこれまで何度聞いてもよくわからなかったので」「(作業の）各段階・各活動に意味があり、とても役に立った」など記述が見られ、「(ポートフォリオ作成の）実際の体験」が「役に立った」という評価に繋がったと思われる。本研修では、教師としての過去の経験や現在の状況を振り返る活動や今後の行動計画について考える活動を行いながら、最終的にELPの構成を参照して設定された「パスポート」「教育実践や研修受講経験の記録帳」「資料集」の３つの構成要素にまとめ、教師ポートフォリオを完成させたが、研修参加者は実際にポートフォリオの作成作業を体験することで、ポートフォリオの構成や記入することの意味についてより深い理解が得られたのではないだろうか。

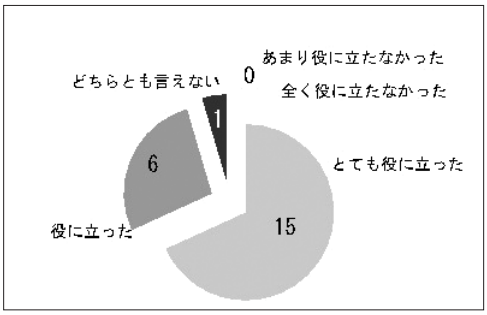

図３　ポートフォリオ作成作業がポートフォリオ理解に与える影響への認識

(教師ポートフォリオ作成作業はポートフォリオの理解に役に立ったか)

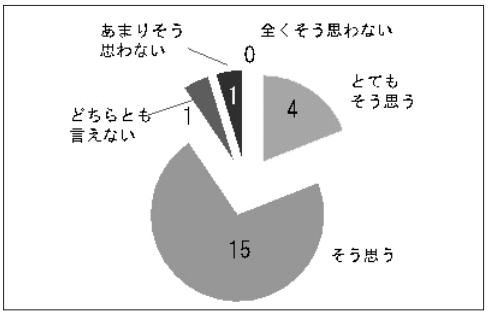

図４　ポートフォリオの継続使用に関する意識

(今後もポートフォリオを使いたいか)

3.1.2 （2）今後教師ポートフォリオを使いたいか

回答は「とてもそう思う」「そう思う」が大部分を占めるが、質問（1）では「とても役に立った」が最も回答が多かったのに対し、質問（2）では「とてもそう思う」ではなく「そう思う」のほうが、割合が高くなっている（図4)。「そう思う」理由として、「大変だがやってみたい」「そう思うが、継続は難しいと感じる。でも少しやってみようと思う」があげられた。質問（1）で「とても役に立った」と回答した研修参加者のうち11名が質問（2）のポートフォリオの継続希望について「とてもそう思う」ではなく「そう思う」とのみの回答していることに鑑みると、試みたいという積極性と継続できるかという不安が、グラフに反映されていると言えるのではないだろうか。

3.1.3 （3）教師ポートフォリオを作成して感じたこと

自由記述の回答数は12件であったが、大別して「ポートフォリオの理解」に関するものと「教

育実践や研修受講歴の振り返りと気づき」に関するものが挙げられた。

ポートフォリオの理解に関するものとしては、「（ポートフォリオが）全くわからなかったが少しは理解できた」「見直すだけでなく、未来に繋げることが大切だと思った」「意義や必要性は理解していたが、改めて続けるための工夫を考えることの重要性を感じた」「自分の記録だと思っていたが、他者との共有に目的を置くのが意外で面白かった」「学生目線でポートフォリオを見直すことができた」が挙げられ、ポートフォリオに対して新たな視点が得られ、認識が深まったことが推察できる。

また、教育実践や研修受講歴の振り返りと気づきに繋がるものとして、「研修等に多く参加しているが、それを有意義に活用していなかったことを実感」「自分が今までやって来たことを時系列で振り返り、点が線に繋がった気がする」「教師としてのこれまでの歩み、現在の教師としての思い、今後目指すことが、このポートフォリオに凝縮されているように感じた」という回答があった。ポートフォリオをまとめあげるための一つひとつの振り返りの活動を通じて、本研修のタイトル示すように「過去－現在－未来の教師としての自分」を振り返るきっかけになったと言えるのではないだろうか。

3.1.4　（4）まだよくわからないこと、もっと知りたいこと

自由記述の回答は７件であったが、「授業への具体的な取り入れ方」「学生用のポートフォリオの効果的な活用法」「学習者ポートフォリオと教師ポートフォリオの違い」「実際のポートフォリオ実践」などが挙げられた。研修参加者の中には、教師ポートフォリオ作成作業を体験したものの、研修中の活動やワークショップの作業と日本語教育現場での実践の関連付けが難しく、学習者用ポートフォリオを具体的に教育活動の中でどのように活用して行けばいいのかという疑問が依然残ったようである。

また、「研修参加経験を線で繋げて行くための具体的な方法」という回答も見られたが、今後教師ポートフォリオを具体的にどう継続していくかという点は課題である。

3.2　教師ポートフォリオ作成ワークショップの意義

本研修の意義は以下の２点にまとめられる。

第一点目として「ポートフォリオの理解」が挙げられる。3.1.1および3.1.3から、教師ポートフォリオを作成する作業を通じて、研修参加者はポートフォリオの役割（ポートフォリオが学習経験を記録し、振り返りながら自律的に学んで行くためのツールであること）を再認識し、継続するための工夫など新しい視点を得たようである。そして、その新たな視点がポートフォリオ作成の意味や活用のためのポイントなど、ポートフォリオに対する理解促進に繋がったことが窺える。

第二点目は「教師の生涯学習支援」の側面である。本研修では、「現在」「過去」「未来」という視点からこれまでの教育実践の経験や受講した研修で得られた学びについて包括的に振り返り、教師ポートフォリオにまとめる作業を行ったが、その過程を通じて生涯学習について考察する機会になったようである。実際、海外で行われている教師研修の多くは、数時間から数日程度の単発型のものも多く、毎回研修テーマが異なっているのが実情である。また、研修内で振り返りの時間が確保されない場合もあり、毎回の研修で研修ポートフォリオを作成しているとは限らない。したがって、研修参加者（教師）は、数多くの研修を受講していても受講した各研修の関連付けや研修での学びと教育実践との連続性が意識化されず、具体的な行動計画に結びつける余裕がないまま、研修受講経験を重ねていることも少なくないのではないだろうか。また日々の実践の中で、個々の研修で得られたものを個人の中で統合し、自己の教師としての成長について考える時間を持つことも困難であろう。そこで本研修のように、ポートフォリオ作成を到達目標（Outcomes）として掲げ、研修中の作業を通して、過去に受講した複数の研修を各教師の中で統括させ、日々の実践を俯瞰的な視点から振り返ることができる機会を設けることは教師支援の観点から有効な方法と言えるのではないだろうか。

3.3　教師ポートフォリオ作成ワークショップの課題

一方、依然として課題も残る。今回の研修は教師ポートフォリオを作成するということが最終課題であったため、ポートフォリオに関する理解は深まったものの、質問紙調査の結果から以下２点のような課題があがった。

第一点目として、教育現場での学習者ポートフォリオへの応用である。今回作成したものは教師ポートフォリオであったため、次の段階として日本語教師の立場で学習者に対して学習ポートフォリオを導入・活用する際の具体的な方法について知りたいというニーズがあった。教師ポートフォリオ作成は、ポートフォリオを記入する側の「学習者（研修参加者）の視点」でポートフォリオを扱うことであるが、それを個々の日本語教育現場において日本語学習者がポートフォリオを効果的に利用できるように支援する「教師側の視点」で捉え直すには、もう一段階の支援が必要であるかもしれない。教師ポートフォリオの作成過程を踏まえて、日本語学習者向けのポートフォリオの活用について再検討する機会が求められるだろう。

第二点目として、3.1.2から今後も継続的に教師ポートフォリオを利用して行きたい気持ちはあるが、実行できるかどうかについてやや不安に感じている状況が推察できる。本研修では３時間半ではあるが、ポートフォリオ作成のためにまとまった時間を確保することができ、また各活動においても他の研修参加者と振り返りの結果を共有しながら進めた。しかし、このような時間の確保や他者との共有という点は研修後日々の教育実践の環境とは異なるため、研修で行ったことを研修後も現場で活用することは容易ではない。したがって、研修の主催者側が

その後の研修時に教師ポートフォリオを継続する機会を設けたり、研修参加者が有志で集まり定期的に教師ポートフォリオを更新して行く機会を設けたりするなどの工夫が必要であろう。

４．まとめ

本研修では、自律的・主体的に学び続ける教師の支援という観点から、自己の教育実践や研修参加経験等を振り返りながら、教師にとっての学習機会の一つである研修を自己の学びの中で活用していくためのツールとして教師ポートフォリオを作成するワークショップを試みた。

教育実践の振り返りやそれを他者と共有する機会は教育実習プログラム中や教え始めたばかりのころは積極的に行われるものの、教育経験を重ね、自己の教授スタイルやビリーフが確立されてくると、教育実践を振り返ること、特にそれを他者と共有する機会は減少してくることもあるだろう。そのような状況の中で、現職教師にとって教師研修は、新しい知識や情報を得るだけでなく、現場での実践を振り返るという意味でも重要な機会である。しかしながら、それらの研修での学びは記録されることなく、研修後そのままになってしまい、教師の成長につながる振り返りの機会や実際の教育現場での具体的実践につながりにくいのではないだろうか。

本研修では、教師ポートフォリオを継続的な教師の成長・熟達化を支援するツールの一つと捉え、教師としての教育実践の経験と研修参加者としての学びの経験を記録し、統合するものとして位置づけた。また研修ポートフォリオの作成体験がポートフォリオの理解へ繋がるよう配慮した。具体的には、研修をデザインする際に、振り返りの機会を多く設け、過去、現在、未来を軸に教師活動を内省し、今後の教師としての学びに必要なことについて考察するということを軸に設定した。そして各活動で作成した資料を再構成すると最後にELPの構成を参照したポートフォリオとしてまとめられるように配慮し、その体験を通してELPの構成要素が具体的にどのようなもので、どのような意義があるかがより深く理解できるよう留意した。

研修参加者のフィードバックから、研修をデザインした研修担当者の意図は概ね伝わったように推察される。しかしながら、ポートフォリオは継続的な学習を支援するツールであり、一度作って終わりではない。今回のワークショップはきっかけであるため、作成したポートフォリオを継続して行くことが一番の課題であろう。今後は、記入や整理がしやすく、振り返りのために簡単に見られるように、eポートフォリオの形で提示することや、教師研修などの機会を利用して他の教師と振り返る機会を設けるなどの工夫が必要だと思われる。

また、本研修は教師ポートフォリオを作成するワークショップであったが、その作成経験を通じて得た知識や感じたことを生かして、学習ポートフォリオにどう繋げて行くかが次の課題である。研修参加者（学習者）として体験したことを、次は教師としてポートフォリオを各教育現場にどのように活用して行くか、学習者の視点と教師の視点の統合が試される。

〔謝辞〕

本稿は、2014年にスペイン・マドリードで開催された「第16回スペイン日本語教師会研修会」で行った研修の実践をもとにしています。研修デザインの段階からご協力いただいたスペイン日本語教師会会長の野崎美香氏、マドリード日本文化センターのアドバイザー隈井正三氏、当日研修にご参加くださったみなさまに感謝申し上げます。

〔注〕

(1) 日本語教育の分野で使用されているポートフォリオには、JF 日本語教育スタンダードのポートフォリオ活用（国際交流基金2010）や早稲田大学日本語教育センターが開発した「日本語学習ポートフォリオ」（黒田ほか2011）、青木（2006）が作成した「日本語ポートフォリオ」のほか、教育機関や教師が独自に開発したものがある。本研修は欧州の日本語教育に関わっている教師を対象とした研修であるため、欧州の言語学習や言語教育の基盤となっている CEFR の理念を具現化した ELP の枠組みや内容を参照した。参照したものは以下の通りである。Council of Europe Language Division (2000) *European Language Portfolio (ELP) Principles and Guidelines with added explanatory notes (version2),* Council of Europe Language Division

(2) ヨーロッパ日本語教師会（2005：54－55）をもとに筆者が一部改編した。

(3) 研修参加者は23名であったが、１名途中で退席したため、質問紙調査の対象は22名であった。

〔参考文献〕

青木直子（2006）『日本語ポートフォリオ改訂版』　<http : //www.let.osaka–u.ac.jp/~naoko/jlp/jlpjp.html> 2014年12月８日参照

岡崎敏雄・岡崎眸（1997）『日本語教育の実習－理論と実践』アルク

片桐準二（2014）「JF 講座受講生のポートフォリオに対する態度変化の過程？受講生インタビューの分析から」『国際交流基金日本語教育紀要』第10号、７-22、国際交流基金

黒田史彦・古賀和恵・坂田麗子・武一美・古屋憲章・柳田直美・相浦裕希・山本由紀子・横山愛子（2011）「日本語学習ポートフォリオ（試作版）の運用及び使用実態―自律的日本語学習が可能な環境の整備に向けて―」WEB 版『日本語教育実践研究フォーラム報告』
<http : //www.nkg.or.jp/kenkyu/Forumhoukoku/2011forum/2011_P14_kuroda.pdf> 2014年12月８日参照

国際交流基金（2010）『JF 日本語教育スタンダード2010』国際交流基金

小玉安恵・木山登茂子・有馬淳一（2007）「外国人日本語教師教育へのポートフォリオ評価導入の試み―17年度長期研修 B コース教授法クラスにおける実施報告―」『国際交流基金日本語教育紀要』３号、95-111、国際交流基金

土持ゲーリー法一（2007）『ティーチング・ポートフォリオ　授業改善の秘訣』東信堂

當作靖彦・横溝紳一郎（2005）「日本語教師の自己成長プログラム」縫部義憲監修・水町伊佐男編『講座・日本語教育学第４巻言語学習の支援』、52-72、スリーエーネットワーク

松浦とも子・佐藤修・柳坪幸佳（2013）「教師研修におけるポートフォリオの意味―教師研修ポートフォリオとティーチング・ポートフォリオ―」『国際交流基金日本語教育紀要』９号、７-23、国際交流基金

林さと子（2006）「教師研修モデルの変遷―自己研修型教師像を探る―」春原憲一郎ほか編著『日本語教師の成長と自己研修－新たな教師研修ストラテジーの可能性を目指して』、10-25、凡人社

ヨーロッパ日本語教師会（2005）『ヨーロッパにおける日本語教育と Common European Framework of Reference for Languages』、独立行政法人国際交流基金

稿末資料

		活動	目的	活動内容、形式	作成物
1	研修概要とアイスブレイク	研修概要、趣旨説明	研修の目的、到達目標、流れなどを理解する		
		マインドマップ（MMP）作成【Before】	研修の「入口」を押さえる	（1）「ポートフォリオ」をキーワードとしたマインドマップを作成する。*【個人】*	D１ MMP Before
2	現在編	私はこんな教師	自分がどんな教師か主観的、客観的に捉える	（2）教師を表す表現をペアでたくさんあげ、他のペアと共有。それらの表現を参考に自分が学生からどう見られているかを想像し、用紙に記入する。*【ペア⇒グループ⇒個人⇒全体】* （3）（2）を参考にどんな教師を目指しているかを記入し、周りと共有*【個人⇒グループ】* （4）教師としてのプロフィールを作成	D３ 目指す教師像 P１ プロフィール
		教授法に関するチェックリスト	教師としての自分（得意分野、不得意分野）を意識化する	（5）チェックリストをチェックし、他の参加者と比較する。*【個人⇒グループ】*	B１ チェックリスト
		現在の課題と関心	教師としての自分の関心や感じている課題を意識化する	（6）現在、日本語教師として関心を持っていること、感じている課題を付箋に一つずつ書き出す。その後、A. 自分で解決できること、B. 他者の協力が必要なこと、C. 自分の力では解決が困難なことに分類しながら、ペアで話し合う。また、相手の話を聞いて一番気になった物を一つ選び、他者にもわかりやすい表現にまとめ、ペアの相手に渡す。*【個人⇒ペア】*	P２ 私の関心と課題
3	過去編	教師になるまでと教師になってからの振り返り	教師、学習者としての自分を振り返る	（7）日本語教師としてこれまでの経験と特に印象に残ったことを一覧表に記入する。また、外国語の学習者としてよかった経験、よくなかった経験を振り返り、一覧表に記入する。その後、ペアで共有*【個人⇒ペア】*	B２ 教師としての経験、学習者としての経験
		研修タイプのまとめ	研修のタイプを整理する	講義　研修の類型	

		過去に参加した研修リスト	過去に参加した研修（教師としての学習経験）を振り返る	（8）これまで受講した研修をリストにまとめ（事前課題）、研修のタイプを書き込む。*【個人】* ＊記入用紙は事前に主催者を通じて参加者に送付	B3 過去に参加した研修リスト
		よかった研修、役に立った研修	自分にとっての研修の意義付け	（9）研修リストを見ながら、よかった研修、役に立った研修をチェックし、その理由も考える。その後周りの人によかった研修について理由を交えて説明する。 *【個人⇒ペア、グループ】*	B4 よかった研修 役に立った研修
4	未来編	成長する私のために	現在や過去の分析がこれからにどうつながるかを理解する	講義　アクションプラン	
		セミナー・勉強会、プロジェクトを考える	現在の状況と過去の経験を分析し、自分たちの教師成長に必要なことを意識化する	（10）（6）や（7）の活動で作成した資料を参考にしながら、グループで、セミナーやプロジェクトを考える。 *【グループ⇒全体】*	B5 セミナー・プロジェクト計画
5	ポートフォリオ再考	教師ポートフォリオ作成	資料をポートフォリオの形にまとめる作業を通して、ポートフォリオ作成を意識化する	（11）研修内で作成した資料を、P（Passport）、B（Biography）、D（Dossier）にまとめ、紙をつけてポートフォリオを完成させる。 *【個人】*	ポートフォリオ完成版
		ポートフォリオの活用	教師ポートフォリオ作成体験からポートフォリオ活用の可能性を考える	（12）ポートフォリオ作成を通じての感想を利点、困難点や課題に分けてシートに記入し、その後で共有する。*【個人⇒全体】*	
		なぜ教師ポートフォリオか？	教師成長における教師ポートフォリオの意義を理解する	講義　省察的実践、経験学習理論	
6	まとめ	「ポートフォリオ」についてのマインドマップ作成【After】	研修の「入口」と「出口」を比較することで研修中の学びを意識化する	（13）「ポートフォリオ」をキーワードとしたマインドマップを作成し、（1）の活動で作成したもの（MMP　Before）と比較する。変化について周りの人と話し合う。 *【個人⇒ペア、グループ】*	D2 MMP After
		3つのキーワード	今日の研修に関して自分にとっての意義を意識化する	（14）3つのキーワードを考え、周りと共有する。 *【個人⇒ペア、グループ】*	D4 3つのキーワード